【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（中学校用）

都道府県名	京都府

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	舞鶴市立城南中学校					
学　年	１年	２年	３年	特殊学級	計	教員数
学級数	5	5	5	2	１７	３２
生徒数	１６４	１９４	１７４	6	５３８	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

生徒が生き生きと学習する授業をめざして

「自ら学ぶ意欲と自ら考える態度を育成する授業の研究」

国語科テーマ
～豊かな言語能力を育成し、伝え合う力を高めるための授業の研究～

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

- １年生・国語科
  生徒の表現力の育成の基盤となる教科、学年であるため。
- ２年生　国語科
  生徒の表現力の伸長を図る教科、学年であるため。

(2)　年次ごとの計画

平成15年度

学　校　教　育　目　標
確かな学び(知)心豊かに(徳)たくましく(体)

地域の実態
- 校区は農村部、新興住宅地、市街地と広範囲にわたる。
- 保護者の教育に対する関心は高く、協力的であり、学校に寄せる期待も大きい。
- 社会状況の変化により保護者の意識も変化しつつある。

めざす生徒像
自ら学び、表現を大切にする生徒
自らを尊び、思いやりのある生徒
自ら心身をきたえ、健康な生徒

生徒の実態
- 落ち着いた雰囲気の中で意欲的に学習に取り組んでいる。
- 明るく素直で、行事などに前向きに取り組めるが、周囲に流されてしまい、自分の意見や意思を伝える力が弱い面もある。

研究主題
生徒が生き生きと学習する授業をめざして
「自ら学ぶ意欲と自ら考える態度を育成する授業の研究」
国語科テーマ　～豊かな言語能力を育成し、伝え合う力を高めるための授業の研究～

研究仮説
＜仮説１＞　少人数授業など、「個に応じた指導の工夫」を計画的かつ効果的に行うことにより、学力の定着及び充実を図ることができるであろう。
＜仮説２＞　「話す・聞く」「書く」という学習活動を重点的かつ積極的に取り入れながら授業を進めることにより、状況や場に応じた実践的な言語能力の基礎を育成できるであろう。

学年目標

１年
国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成するため、目的や場面に応じて的確に話したり聞いたりする能力及び自分の考えをまとめ、書き表す能力を高めるとともに、話し言葉を大切にしようとする態度を育てる。

２年
国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成するため、目的や場面に応じて的確に話したり聞いたりする能力及び、自分の考えを深め、自分の立場を明らかにして書き表す能力を身に付けさせるとともに、話し言葉を豊かにしようとする態度を育てる。

３年
国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成するため、目的や場面に応じて的確に話したり聞いたりする能力及び、自分の考えを理論的に書き表す能力を身に付けさせるとともに、話すことや書くことによって生活を豊かにしようとする態度を育てる。

○　テーマ
「自ら学ぶ意欲と自ら考える態度を育成する授業の研究」
国語科テーマ
～　豊かな言語能力を育成し、伝え合う力を高めるための授業の研究　～

○　研究主題設定の理由
本校では「確かな学び（知）心豊かに（徳）たくましく（体）」という学校教育目標のもと、「自ら学び、表現を大切にする生徒」「自らを尊び、思いやりのある生徒」「自ら心身をきたえ、健康な生徒」を目指す生徒像に掲げ、日々

教育実践に取り組んでいる。
　校区は広く、城下町の面影を残す市街地と農村地域からなるが、近年になり、校区内に新興住宅が増え、生徒や保護者の価値観も多様となってきている。生徒は、総じて明るく素直で、落ち着いて学習に取り組んだり、行事などにも積極的に取り組んだりすることができる。
　しかし、学校生活における生徒たちの会話や発言等の実態から、言葉によるコミュニケーションの力や自己表現の力に弱さを感じることが多く、言語能力という点から見たとき、語彙力も含め、特に「話す・聞く能力」に課題が見受けられる。
　平成１５・１６年度「学力フロンティアスクール」「京都夢・未来校」の指定を受けるに当たり、国語科のみならず、学校全体として「確かな学び（知）」を培うためには、基礎・基本を定着させるとともに、受動的な学習態度から脱して、生徒自らが「おもしろい」「やってみたい」という意欲を持ち、様々な課題に対して生徒自らの力でそれを解決しようとする学習姿勢を育てることが大切であると考えた。また、日々の学習をはじめとして、あらゆる教育活動の中で生じる「なぜ・どうして」「こうしよう・こうしたい」「わかった」など、生徒が自らの思いや考えを表現する際に、よりわかりやすく相手に伝えたり、相手の伝えようとしている内容を的確に受け止めたりできる力などをはじめとして、日常生活で生きて働く豊かな言語能力を身に付けさせることが国語科の重点的課題であると考え、本主題を設定した。

○　研究仮説
＜仮説１＞
　少人数授業など、「個に応じた指導の工夫」を計画的かつ効果的に行うことにより、学力の定着及び充実を図ることができるであろう。

＜仮説２＞
　「話す・聞く」「書く」という学習活動を重点的かつ積極的に取り入れた授業を進めることにより、状況や場に応じた実践的な言語能力の基礎を育成できるであろう。

○　仮説検証の手だて
＜仮説１＞
ア　単元や教材により、柔軟な学習集団の編成を行うことで、指導の効果を高める。
イ　生徒の学習意欲をより高めるため、指導方法の工夫・改善、教材・教具の開発に力を入れる。
ウ　指導と評価の一体化を図ることで、学習に対する生徒一人一人の願いや思いを大切にした授業改善を行う。

＜仮説２＞
ア　「話すこと・聞くこと」を中心とした単元の指導の工夫を行い、「話すこと・聞くこと」の学習の習慣化を図る。
イ　授業の中で、「書く」・「話す・聞く」という表現活動の場をできる限り設ける。
ウ　ディスカッション等の計画的な設定→実践的な言語能力を定着・充実させる場とする。

○　研究の内容・方法
ア　指導形態の工夫
　(ｱ)　習熟の程度に応じた少人数授業
　(ｲ)　課題追究の方法別による少人数授業
　(ｳ)　その他均質な集団による少人数授業
イ　授業展開にあたっての工夫
　(ｱ)　伝え合う力を育成するための前段階として、教材ごとに初感や教材を

終えての感想、疑問に思ったこと等を書かせ、自分の思いを文章で表現できるように全学年で取り組んでいる。
　時間のある限り全員に発表させ、他者の良い表現を全員で共有することで、全体の表現能力の向上を図る。
(ｲ)　教材によっては一人読みを取り入れ、じっくりと作品に触れることによって、作者の思いを読み取ったり、自分の考えを深めたりする機会を設定している。
　一人読みの状況をプリントやノートに書かせ、毎時ごとに教師が生徒一人一人の学習状況を点検し、よいところを認めたり、発展的な課題を提示したりするコメントを書いて返すことによって、さらに生徒の学習意欲を引き出したり、学習を深めさせたりしている。
(ｳ)　調べる学習を取り入れ、グループごとに課題に応じて図書等やコンピュータを使って調べ、まとめ、クラスで互いに発表し合うことによって、発表の方法を学ぶ時間を設定している。
　また、他教科や総合的な学習の時間等、他領域との連携を図り、発表する力の基礎を培う。
(ｴ)　一つの課題について小グループでバズ・セッションを行う機会を設定している。小グループのため自分の意見を話しやすく、比較的自由に発言ができる雰囲気を創りだしている。
　繰り返し行うことにより、自分の意見を発表することの抵抗感がなくなってきている。
(ｵ)　授業に入る前に一分間スピーチを取り入れている。最初は自己紹介等から始め、最終的に設定した課題について自分の意見を発表できる場にする。
　聴衆を前に話すことに対する抵抗感をなくす。自分と違う意見を聞くことで、さらに自分の考えを深める機会とする。
(ｶ)　発表の際に、評価カードを用い、自己評価、相互評価を行っている。
　他者からの評価を本人に返すことで、自己の評価と比較したり、気付かなかった点を発見したりできる。

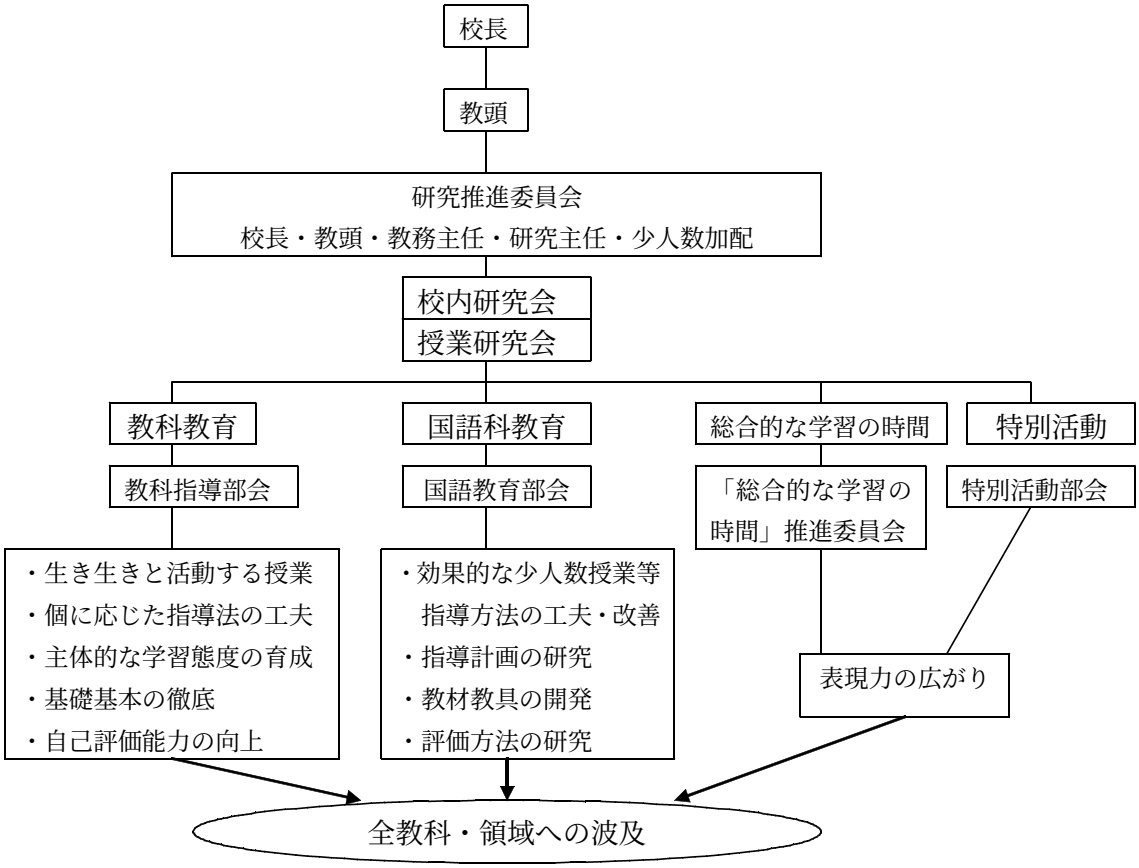
ウ　選択授業の工夫
　発展的な学習内容と語句・語彙を豊かにすることをねらいとし、以下の学習に取り組む。
(ｱ)　多くの名文や有名な詩歌にふれさせ、鑑賞と暗唱に取り組む。
(ｲ)　慣用句・ことわざ・類義語・対義語などの意味や用法をゲームやワークシートなどを通じて学ばせる。

○　評価について
ア　年間指導計画に沿って評価計画を作成し、どの単元・教材で、どの力を重点に育てるかを明確にして指導し、目標に照らし合わせて評価する。
イ　単元ごとの具体的な評価規準を作成する。その際、「十分に満足できると判断される状況」と「努力を要する状況への手立て」を明らかにし、指導と評価の一体化を図る。
ウ　少人数授業の指導においては、指導に当たる教師によって、個々の生徒の特性や学習の深まり等についての把握に齟齬が生じないよう、十分な打ち合わせを行う。
エ　生徒自らが目標を持って学習に取り組み、その成果や課題を明らかにしていく力を身に付けさせるため、生徒の「自己評価」「相互評価」を充実させる。
オ　評価の方法としては、次のような方法を考える。
(ｱ)　「観察」により、生徒個々の学習への関心・意欲・態度や習熟の程度等を評価する。
(ｲ)　「ワークシート（構想表）・作品」等により、発展的な学習の力も含めて評価する。
(ｳ)　「自己評価・相互評価」の内容を工夫し、指導に生かす。
(ｴ)　「多様なテスト」を実施し、学習内容の理解や定着の状況等を把握し、

	評価する。 (ｵ)　「学習ノート」から、授業展開や要点の理解状況、個々の学習の工夫等を評価する。

平成16年度	○　テーマ 「自ら学ぶ意欲と自ら考える態度を育成する授業の研究」 国語科テーマ ～　豊かな言語能力を育成し、伝え合う力を高めるための授業の研究　～ ○　研究の見通し 初年度の研究の成果と課題を踏まえ、単元・教材ごとに柔軟な指導形態を取り入れながら、言語能力の育成を中心に個の力の伸長を図る。

(3)　研究推進体制



Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

○ 生徒の変容

ア　日常的に「書くこと」「話すこと・聞くこと」の言語活動を取り入れることにより、全体の場で発表したり、表現したりする力が育ってきた。

イ　ディスカッションを授業の中に取り入れることにより､「意見交流をして楽しかった」「いろいろな考え方があることを知った」「もっとたくさんの人の意見を聞きたい」という生徒の感想が出るなど、討論に対する生徒の意識の変革が見られ た。

ウ　学習集団を柔軟に編成したり、学習形態を工夫することにより､学習に対する関心・意欲・態度の向上が見られた。

エ　少人数授業での指導は個々の生徒にきめ細かな指導・支援が行え､生徒の発表す

る機会も増えた。このことは少人数授業による学習は「挙手しやすい」「質問しやすい」「学習内容がよくわかるようになった」と１回目（６月）よりも２回目（１月）のアンケートに答えた生徒が増えていることからも明らかである。

オ　学習の習熟の程度に応じた編成による少人数授業では、生徒自身が、「わかる」「できる」を実感していた。

生徒へのアンケート結果から

『少人数授業の良い点』

- 分からないところも質問しやすい。
- 発表しやすく、発表の回数も増えた。
- 集中して取り組める。
- 一人一人に細かく説明してもらえる。
- 分かりやすい。
- 指名回数が多いのでがんばれる。

○　教師の変容

国語科はもとより、全教師で個に応じた指導の研究を進めることができた。

２．今後の課題

(1)　「書く能力」「話す能力・聞く能力」の育成に向け、計画的で系統的な繰り返しによる指導や生徒相互の学びあいを基盤とした個に応じた指導の研究の充実を図る。

(2)　学習したことが社会生活の中で実践できる指導の研究を深める。

(3)　国語科と他教科・領域との連携を図った研究を進める。

(4)　教師間の連携や研究協議による授業改善を進めるため、打ち合わせ時間の確保と内容の充実を図る。

(5)　努力を要する状況の生徒への手立てを含め評価について、さらに研究を深める。

Ⅳ　学力把握のための学校としての取組

○　国語基礎診断テスト(校内)の実施(１・２年生で年１回実施)

- ４月９～１１日に実施
- 自作問題(１年生は小学校６年生、２年生は中学校１年教材より)による。
- 語彙に関する問題や読む能力、表現の力(書く能力)等の把握
- 結果分析を行い学力の現状の把握の一助とする。

○　生徒へのアンケートの実施

- 少人数授業への感想、意欲や関心等を含め、生徒の変容を把握する。
- 実施時期は６月と１月、実施学年は１、２年生
- アンケート結果の一部紹介（単位％）

	１　年	２　年
問１　国語は好きですか。	**6月 → 1月**	**6月 → 1月**
はい（どちらかといえば好き含む）	**35.4 → 52.4**	**22.2 → 41.2**
いいえ（どちらかといえば嫌い含む）	**31.2 → 15.2**	**34.7 → 18.1**
問２　授業はわかりやすいですか	**6月 → 1月**	**6月 → 1月**
はい（少し分かりやすい含む）	**89.4 → 94.0**	**90.5 → 90.9**
いいえ（少しわかりにくい含む）	**10.6 → 5.9**	**9.5 → 9.2**

※　第１回目（６月）に比し、半年後の２回目（１月）には、「良好」な回答が増えた。

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

「平成１５年度について」

１　舞鶴市中学校教育研究会国語部会夏季研究会

(1)　日　時　　平成１５年８月１８日(月)９：００～１２：００

(2)　場　所　　舞鶴市西駅交流センター

(3)　対　象　　舞鶴市中学校教育研究会国語部員（参加１５名）

(4)　実践報告　「個に応じた指導（少人数授業の実践)」

(5)　成　果

ア　個に応じた指導など、指導方法の工夫改善の交流ができた。

イ　指導案を通して少人数授業の実践を紹介できた。

２　平成１５年度京都府中学校教育研究会国語教育研究大会

(1)　目　的　　地域の課題、生徒の実態を踏まえた研究活動を推進し、もって京都府の中学校教育の進展向上に寄与する。

(2)　日　時　　平成１５年１１月１２日（水）

11:00 ～ 11:50 公開授業　　京都府舞鶴市立城南中学校（本校）

１年３・４組（少人数授業３講座)、３年２組で実施

（伝え合う力の育成を目指した研究の中間発表を兼ねて実施）

13:30 ～ 14:10　全体会

14:10 ～ 16:20　分散会及び研究協議　舞鶴市西駅交流センター

(3)　対　象　　京都府公立中学校国語科担当教員等（参加７１名）

(4)　テーマ　　「伝え合う力」を高める授業の創造

～　個性を生かし、言語感覚を豊かにする　～

(5)　成　果

ア　テーマに沿った研究の成果を授業に生かせた。

イ　音声言語の指導について、工夫や改善点が見いだせた。

ウ　多くの参加者を得て、活発で前向きな意見交換ができた。

エ　学習指導要領に基づく府内各地の研究や実践の交流ができた。

オ　中学校国語科の指導における「伝え合う力」の育成及び個に応じた指導の重要性についての再認識を深める機会となった。

３　第６回中丹地区学力向上推進協議会「中学校部会」

(1)　日　時　　平成１６年１月２０日(火)１３：３０～１６：３０

(2)　場　所　　京都府総合教育センター北部研修所

(3)　対　象　　管内各中学校研究主任、各市町指導主事（参加３０名）

(4)　実践発表　「個に応じた指導」

(5)　成　果

ア　個に応じた指導（国語科における取組）を紹介することができた。

イ　指導方法の改善を進める研究推進の状況を紹介できた。

４　「授業改善実践事例集ⅩⅢ集」（中丹教育局編集）に研究実践内容を掲載し、平成１５年度末に管内小・中学校に配布予定。

「平成１６年度について」

１　平成１５・１６年度京都府教育委員会指定京都夢・未来校

平成１５・１６年度文部科学省指定学力向上フロンティアスクール

国語研究発表会

(1)　日　時　平成１６年１１月１９日（金）（開催予定)

(2)　場　所　京都府舞鶴市立城南中学校（本校）

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　■　１５年度からの新規校　□　１４年度からの継続校

【学校規模】　□　３学級以下　□　４～６学級
□　７～９学級　□　１０～１２学級
□　１３～１５学級　■　１６学級以上

【指導体制】　■　少人数指導　□　Ｔ．Ｔによる指導
□　その他

【研究教科】　■　国語　□　社会　□　数学　□　理科
□　外国語　□　音楽　□　美術　□　技術・家庭
□　保健体育　□　その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　■　有　□　無